39 鹿乗橋

かのりばし

名古屋のベッドタウン・高蔵寺ニュータウンの近くにある鹿乗橋は、2連のコンクリートアーチ橋である。「看板に偽りあり。“かねの橋”ではない！」と、気の早い読者は息巻くかも知れない。しかし当初かけられた鹿乗橋は鉄のアーチ橋で、現在の橋は、それを骨組みにしてコンクリートを巻いたものといえば、納得していただけるだろうか。

しかも鹿乗橋は、明治期に架設された13橋の鋼アーチ橋のひとつであり、現存する橋がほとんどないことを考えれば、貴重なことはいうまでもない。同じような橋に、東京多摩川にかかる万年橋（No.37）がある。

回りの雰囲気を知ろうと思い、高蔵寺駅から現地まで庄内川にそって歩いてみた。橋の近くにくると、今は人の気配もなく荒れているが、かつては小粋なたたずまいを見せていたと思える家屋が目につく。むかしは渓谷美あふれた景勝地として、人びとのにぎわいを集めたにちがいない。それゆえ橋面上に構造部材が突出しない上路式のアーチ・タイプにしたこともうなずける。

『日本工業大観』記載の樺島正義の一文によれば、明治の中ごろ、橋梁技術者は次のような美意識をもって橋を設計している。「アーチ橋は、市街地環境と調和するので、市街地に架設する橋は、可能な限り、優美な曲線をもつアーチ橋を採用した」。上路式と下路式のちがいについてもふれている。「上路式の橋は、下路式の橋と違い、橋梁内外の眺望を邪魔しない」。このような考え方が、風光明媚な景勝地にも取り入れられ、橋のタイプが決められたのではないだろうか。当初の橋は、工事費を節約するため橋床は木張りで、橋脚の周囲は切石積みであった。

橋桁の端部に取り付けられた銘板から、コンクリートを巻いたときの事情がわかる。「架設後40年以上にもなったこの橋は、鉄骨部材が腐食し、橋の強度が半分の55%に低下した。そのため、あらたに鋼材を入れ、コンクリートで被覆して補強した」。工事は愛知県直営でおこなわれ、昭和26年に終えた。銘板には設計監督者の名前も記されている。

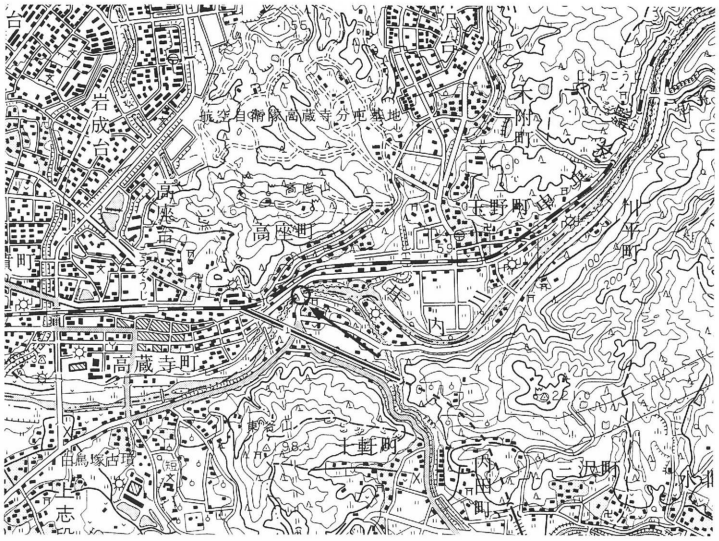
春日井市から入手した資料には、次のように橋名の由来が書かれていた。「昔、高蔵寺の本尊薬師如来が白い鹿に乗って、この渕から上られたことから、この名がついた」。「この渕」も鹿乗渕と呼ばれた。

橋の南詰めには、“白鹿”という料亭もあったが、現在はホテルに変わった。

今回、土木学会内にもうけられた歴史的鋼橋調査の小委員会でしらべた結果、「明治期の鋼アーチ橋は現存しない」という俗説を書き変えねばならなくなった。愛媛県新居浜市に、明治38年(1905)に架設された遠登志橋が現存することが判明したからである(No.32)。役所でなく、民間企業である別子鉱業所が架設したため、いままであまり知られていなかったと思える。だから歴史は面白い。〔ＩＴ〕

竣工年月：明治43年（1910）、昭和23年（1948）コンクリートで巻き建て
所在地：愛知県春日井市－瀬戸市
河川名：庄内川
橋長・幅員：73.0ｍ×4.5ｍ
径間数・支間長：①1×7.65ｍ＋②1×27.43ｍ＋②1×27.43ｍ＋①1×7.65ｍ
形　式：①ＲＣ単純桁、②上路メラン式コンクリートアーチ

むかし橋面下に交錯していた斜材は，
コンクリート巻立てのとき撤去された。



（1:25,000　瀬戸）

河中の岩から立ち上る橋脚にもコンクリートが打ち足されている。

〈1989年3月，撮影・共に伊東　孝〉